

福井支部ニュース

2022年度 第8号

日本科学者会議福井支部

連絡先：山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆2022年度 JSA 福井支部 第4回幹事会の概要報告 (山根 清志)
- ◆時評紀行 風力発電・放射性廃棄物紀行(1) 雷電海岸 (小野 一)
- ◆随想 古本屋のひとりごと(3) (高木秀男)
- ◆紀行 ドイツ・スイスで家族旅行を楽しむ (山本 富士夫)

[2022年度 JSA 福井支部 第4回幹事会の概要報告]

11月14日午後6時からJSA福井支部第4回幹事会がオンラインで開催された。事前に案内があった議題は、開会挨拶後、①支部例会、②支部結成50周年記念事業について、③『福井の科学者』2022年12月号案…特集「省エネ、再生エネ」について、④支部ニュースについて、⑤第24回総合学術研究集会 in 大阪について、⑥支部財政について、⑦JSA北陸3県について、⑧JSA全国より…役員選考のための事務局員、代表幹事候補者推薦のお願い、⑨その他(学習会、集会などの紹介)、⑩『日本の科学者』バックナンバーの無償配布について、最後に閉会挨拶。

①支部例会、では、まず10月例会として去る10月22日開催された小野一氏による「ロシアによるウクライナ侵略戦争について」講演が、会

場への来場者約30名程度、Zoom参加19名、YouTubeでの視聴79名と、盛況裏に終わったことを確認。◎「大学の自治と学問の自由」と学術会議問題、◎原発問題、◎核共有…アメリカ合衆国と約束している問題について、等に関しては、前回幹事会以後の具体化に向けての進捗度をわかっているかぎり確認した。前回幹事会で11月例会として開催予定にあげていた、「政府によるデジタル化推進と現場教育」は、予定報告者小倉幹事から故あって無期限延期が取下げにして欲しいとの意向が示され、已むなしということになった。そして、◎科学者の権利問題が、例会開催日程を来年1月中とすることに決まった。

②支部結成50周年記念事業については、特に進展なし。いずれにせよ今年度中にはプロジェクト立ち上げが欠かせないということになる。

③『福井の科学者』2022年12月号案…特集：「省エネ、再生エネについて」は、宮本編集長から、原稿が集まらずこの15日締め切りは無理、12月に出すのは無理で、1ヶ月延ばしたいとのこと。

④支部ニュースについては、担当の小倉幹事から、第4回幹事会概要報告の記事原稿が出てくれば、近日中にも8号が出せるとの説明があった。

⑥支部財政について、では、代表幹事からセットで扱われるべき会員拡大の項目が脱落しているとの指摘がなされた。

⑦JSA北陸3県について、では、JSA北陸地区シンポに關係して石川支部・直江氏の手になる「JSA北陸地区シンポ(2023年4月開催)の企画原案」が送られてきている。2004年の法人化、近年の経済安保法と国際卓越研究大学法、更に直近の大学設置基準改定(2022.10.1施行)という流れを踏まえると、シンポ標題(仮題)として「選択と集中を基本とする政府方針は、大学の改善に資するものになっているか」を掲げることは理があるように思えるが、今までのやり方の踏襲を前提とするなら、福井、富山両支部から報告者を立てるのは至難であろう、というのが発言者の大方の意見であった。

幹事会の終了は午後8時15分、出席幹事は延べ10名であった。

(山根 清志)

【時評紀行】風力発電・放射性廃棄物紀行(1) 雷電海岸

「『核』を絵筆で塗りつぶせ ペンで書きあらためよ」。原稿用紙とキャンバスをかたどった石碑が、港を見下ろす山の中腹にある。建立者の画家・窪島誠一郎は、作家・水上勉の子。故郷若狭に群立する原子力発電所を批判した父を偲び、代表作『飢餓海峡』の舞台・岩内の地に「三行の希い」を刻んだ一碑を建立するものなり、とある。

2022年夏、私たちの研究グループは北海道を旅した。岩内から湾を挟む至近距離に、泊原発がある(写真)。長年反原発運動に携わり、美浜町の松下照幸町議とも親交のある佐藤英行町議に、木田金次郎美術館で話を聞いた。岩内出身の画家・木田金次郎は、有島武郎『生まれ出づる悩み』のモデルである。小説に登場する青年(作中では木本)は、厳しい漁村の労働と生活苦に追われながら、それでも絵への情熱を持ち続ける。絵の具を買う金もなく、鉛筆書きの粗末な画用紙が、魚臭い新聞紙に包まれて届いた。「この地球の生まんとする悩み、この地球の胸の中に隠れて生まれ出ようとするものの悩み——それを僕はしみじみと君によって感ずることができる。」

岩内大火(1954年)に端を発し、青函連絡船洞爺丸(作中では層雲丸)の沈没、下北半島、東京、丹後と舞台を移して展開する『飢餓海峡』は、壮大なエンターティメント小説。貧しさゆえの人間の醜さ残酷さも垣間見え、後味の悪い読後感を覚えるかもしれない。だが、晩年は反原発に傾斜する作家の足跡はいかに。「使い捨ての文明のエネルギーを生むのが原発炉なら、『一滴の水』を惜しめといった禅僧の言葉は一見矛盾に思える。けれど、思いをふかめれば、ふかい哲学として、汲めどもつきぬ価値をもって胸を打つのである」。水上により開設された若州一滴文庫が、出身地のおおい町岡田にある。

積丹半島の西の岩内からさらに進むと、雷電海岸に達する。水上をして『飢餓海峡』を構想せしめたのは、奇岩怪石の突出する雷電海岸に生身の人間を歩ませてみたいと思ったことだという。今では高規格の国道が、断

崖絶壁を長大トンネルで貫く。それでも気象の荒々しさは窺い知れよう。雷電海岸から蘭越町を経て寿都町へ至る一帯は、全国有数の風力発電地帯である。寿都といえば、2020年夏の放射性廃棄物最終処分場「文献調査」で物議を醸したが、町営の風力発電事業で先駆的成功を収めた町でもある。

JSA 福井支部で省エネや再生可能エネルギー、さらには、県内でも計画のある風力発電についてどう考えるべきか議論が盛り上がっていた時、私が横槍を入れた。福井県は原発密集地で、地元経済の原発依存が構造化して久しい中、反対運動は盛り上がりにくい。都会の反原発運動家は、健康被害が最も深刻なはずの地元住民がなぜ反対の声を上げないのか不思議がるが、彼らは原発なしでは生きていけない地域の実情にしばしば無関心である。一部には、原発立地は再生可能エネルギーにシフトすればよいとの言説もあるが、例えば風力発電にも環境負荷や健康被害の問題がある。へき地の発電所からの電力を都市部の住民が消費する大規模集中型エネルギー供給システム。それを成り立たせる多額の補助金。この条件が変わらぬ限り、結局は財源に乏しい弱小自治体に迷惑施設が立地する。原発であれメガ風力であれ、事情は同じである。

こうしたこともあってか、JSA 福井支部ニュースでの連載記事のお誘いを受けた。私の旅の経験を元にしたエッセーふうの文章なら書けるかもしれないと思い、引き受けることにした。今回分(雷電海岸)に続き、寿

都、対馬、サロベツ原野、ドイツ、東京を巡る6回シリーズを予定する。一見異質な放射性廃棄物問題と風力発電がつながっていること、原発に再生可能エネルギーを対置する批判理論も、地方自治への適切な理解がなければ大規模開発事業に取り込まれてしまう危険性があることなど、明らかにできればと思う。(小野 一)



【随想】 古本屋のひとりごと（3）

松尾斗伍郎先生が亡くなる1ヶ月ほど前だったであろうか、先生が杖を突きながら私の家を訪ねて来たことがあった。先生は以前から自然エネルギー利用の運動に取り組んでおられたが、訪問の目的は原発廃止運動への協力要請であった。この日、化学が御専門の松尾先生に私が外国の古書店から購入した化学者のラヴォアジエや数学者のラグランジュ、オイラーの著書などをお見せしたら、大変貴重なものだと言われていた。これらの原書は科学堂の特選古書目録に掲載されている。ということは、これらの目玉商品はまだ売れていないということである。高いものでは価格が35万円もするので、売れないのも頷ける。

ラヴォアジエは「17世紀科学革命」と呼ばれる力学の完成より約一世紀遅れた「化学革命」の立役者の一人であるが、フランス革命の際、ギロチンにかけられ処刑された。彼は貴族で徴税請負人であったため、民衆から反感をかったことによる。徴税請負人は国王のために間接税、特別消費税、塩税、タバコ税、印紙税などを徴収する人で、年に一定の金額を国庫へ前納して国王から徴税権を得た請負人である。

ラグランジュは彼の死を悼み、「ラヴォアジエの頭を切り落とすのに一瞬も必要としなかったが、これと同じ頭を作るには百年以上かかるであろう」と言ったと伝えられている。なおギロチンはいかにも恐ろしい処刑具に見えるが、意外にも国会議員で医者ギョタンが死刑囚の苦痛を減らすために考案した器具である。この器具の発明は、フランス革命後の人権宣言によって、拷問の禁止や刑罰の方法が変わったことに関係している。

ところで科学史に登場するような科学書の価格は、いくらぐらいするのだろうか。1998年のクリスティーズに出品されたニュートンの『プリンキピア』初版は、予想価格をはるかに超えて4千数百万円で落札され話題となった。しかしこの価格も、2016年にクリスティーズにおいて3億8千万円というとんでもない値で更新された。この記録が科学書の最高値である。

では他の本はどうか。ちょっと古いが1995年に開かれた日本古書籍商協会創立30周年記念展目録には、ガリレイの『天文対話』初版・初刷（1632年）が350万円で出品されていた。私は東京美術倶楽部で開催されたこの古書展を見に行った。参考までに出品されていた他の書籍をいくつか紹介すると、シーボルトの『日本』5冊（1832～53年）が800万円、トマス・アキナスの『神学大全』初版（1485年）が980万円、ゲーテの『色彩論』初版（1810年）が275万円、グーテンベルク聖書（1456年頃）の零葉が250万円、フランシスコ・ザビエルのポルトガル国王ジョアン3世あて書簡（1548年）が850万円といったものが並んでいた。こうして並べてみると、ガリレイの『天文対話』が350万円なら高くないという気がする。

ところで、私はかつて福井大学工学研究科の修士課程の院生に科学史に関する講義を担当し、17世紀科学革命や20世紀科学革命に関する話をしていた。17世紀科学革命とは、コペルニクス、ガリレイ、ケプラー、ニュートンらによって力学の法則が明らかにされ近代科学が誕生したことを指す。ガリレイは17世紀科学革命で重要な役割を果たしたが、『天文対話』の出版もその一つである。この本は今では岩波文庫で入手できる。だが、近頃の学生は古典を読まない。私は講義中に『天文対話』を読んだことがある人の拳手を求めたが、残念ながら手を挙げた人は一人もいなかった。『天文対話』は非常に面白い本である。だが彼がこの本で示した「地球が動いている決定的証拠」は間違っていた。だから科学史の勉強は奥深く興味深い。（つづく）
（高木 秀男）

支部ニュースへの寄稿・投稿を

支部ニュースへの積極的な寄稿・投稿をお願いします。

◆「日本の科学者」などの評論、時事評論、書評、活動報告、事例紹介、行事案内、紀行、エッセー、お知らせ、など何でも

支部ニュース担当者までメールでお送り下さい。

yamane@f-edu.u-fukui.ac.jp

ogura@u-fukui.ac.jp

【紀行】 ドイツ・スイスで家族旅行を楽しむ

(1) はじめに

今春、息子（東京在住）が9月に開催されるベルリンマラソン大会に視覚障害ランナー（以下、ランナー）の伴走者として参加するので、両親も見に行かないかという誘いを受け、9月24日（出国）から10月8日（帰国）までドイツ・スイスでの約2週間の家族旅行を楽しんできました。

(2) ベルリンマラソン大会参加の視覚障害ランナー

息子の所属するクラブから3ペア（男子1、女子2ペア）が参加しました。全員が制限時間6時間15分以内に完走したそうです。走っている間、伴奏者が走路の案内だけでなく街の景色や沿道からの応援の様子などをランナーに伝え、互いに励まし合いながらランニングを楽しんだそうです。ランナーたちと私の家族（息子、娘夫婦、孫）が合流した食事会・飲み会では、みんながよく食べ飲み、おしゃべりを楽しみました。

(3) ロシアによるウクライナ侵略戦争の影響

娘婿（ドイツ人）の話によれば、ドイツ政府が過去の戦争反省から人道主義によって、①ウクライナを支援する、②軍事予算を増やすという政策を発表したところ、極左と極右の人たち合計約15%がそれに強く反対したが、残りの85%は賛成しているそうです。後者の中には、また、もっと教育や福祉のための予算を増やすべきだという意見も多いということでした。なお、市内では、特に警官が多いこともなく、戦争の影響を感じませんでした。

(4) 買い物と食事

ドイツでは、食料品に消費税がかからないそうです。市場で見た食品の値段は、急激な円安の最中でしたが、円に換算してもかなり安いと思えました。魚肉類も野菜も新鮮でした。特に、色とりどりの珍しいキノコがた

くさん売られていました。食事では秋の味覚としてキノコ料理を堪能しました。チーズとバターや味付けソースなどは、レストランごとに伝統と個性があり、日本のものとは違った美味しさがあり、飽きることはありませんでした。

(5) おわりに

帰路の航空機はビジネスマンらで満員でした。成田空港では、スマホに入れたMySOSというアプリを見せて検疫を無事に通過できました。今回、子どもたちのおかげで旅行を十分楽しむことができました。

（山本 富士夫）



ミュンヘン郊外にあるチーズ店は、牧場を持ち、チーズの醸成・販売で有名

2022年度後期の会費納入をお願いします

今年度後期の会費をお願いします。また、過去の未納会費のある方は、分納でも結構ですので、至急納入をお願いします。

<<編集後記>>

福井支部ニュースの第8号をお届けします。

COVID-19は収まる気配がなく、第8波に突入しました。第7波のオミクロンの変異株が、ケルペロスとかグリフォンなど更に多様な変異株を生み出して、世界的規模で広がりつつあります。岸田政権の波への対応の基本はマスク着用の指針のガイドです。安倍時代からごり押ししてきた公的医療体制の縮小と自由診療化施策を、このパンデミックの3年間でも継続してきています。ファクターXの効果も空しく、第7波では新型コロナ死者数が、米国などを陵駕して世界のトップを記録しました。昨年日本で最大の死者数を記録した大阪は、維新が橋下知事以来の公的医療体制縮小の先鋒です。岸田政権は、ワクチンも、トマホークも米国頼み、原発運転延長に熱中し、社会福祉政策は「自助」「共助」を強化。八方ふさがりの状態ですが、それでも希望の火は灯さないといけません。 … (OG)